

20. 復活

ペテロの手紙#20

<https://ichthys.com/Pet20.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

第一ペテロ 1 章 3-5 節の＜イクシス＞訳：

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、その大きなあわれみによって、私たちをイエス・キリストの復活によって生ける希望に生まれ変わらせ、朽ち果てることも、汚されることも、消えることもない相続財産を受け継がせてくださいました。この相続財産は、私たちのために天に保管されており、私たち自身も神の力と神への信仰によって守られ、終わりの時に明らかにされる究極の解放へと備えられています。

序文： 私たちが新しく生まれた「生ける望み」とは、復活のことです。神は私たちのうちにご自身の真理の種をまかれました（[マタイ 13 章](#)；[マルコ 4 章](#)；[ルカ 8 章](#)）。その結果、私たちは肉によってではなく、神のことばという水と、そのことばを私たちに働きかけてくださる聖霊の働きによって、もう一度生まれたのです（[ヨハネ 3 章 5 節](#), [3 章 8 節](#), [4 章 10 節](#)）。イエス・キリストを信じる信仰によって、私たちはすでにこの新しいいのちを内に持ち、主が再び現れるとき、この永遠のいのちが新しい体となって花開き、永遠に主とともに生きるという確かな望みをもって生きています。この私たちの望みは「生ける望み」です。それは、永遠のいのちを永遠の体のうちで経験する、その「復活の体」を見つめているからです。

復活について： 復活の教えは、1 世紀のペテロの読者たちにとって特に重要な関心事でした。これまでの学びからわかるように、彼らは貧しく、迫害を受けていました。そのような痛みと苦しみの中で（ペテロの手紙全体における非常に重要なテーマでもあります）、彼らがこの世の問題や困難をもう耐える必要のない時を待ち望むことは、何よりも大切なことでした。ある程度の苦しみなしに、信仰者としての大きな成長はありえないと言っても過言ではありません。霊的に成長するためには、私たちの考え方を神の考え方へ、私たちの優先順位を神の優先順位へ、そして私たちのものの見方を神の視点へと変える必要があります。神は、苦しみを通して私たちがこの世と自分の人生の見方を変えられるように導かれます。そして、苦しみを通して私たちが神に頼ることを学べるようにしてくださるのです。私たちの地上の体が、すばらしい永遠の体へとよみがえると

いう聖書の教えは、この「新しい考え方」が向かうべき中心の一つです。希望の目をもって見るなら、私たちはやがて新しい体が現実となるその日を見通すことができます。

使徒パウロがアテネのアレオパゴスの丘で、「知られざる神」への信仰を弁明したとき、アテネの知識人たちは丁寧に耳を傾けていました。ところが、パウロがイエス・キリストの復活について語った瞬間、空気が一変しました([使徒 17 章 22-34 節](#))。「死人のよみがえり」という言葉を聞いたとたん、ある者たちは彼をあしらい、またある者たちはあざけり笑いました。しかし、その中のごく少数だけが、心を動かされて神を求め、さらに聞こうとしたのです。今日でも、二千年前と変わらず、死者が文字どおり再び命を得るという考えは、人々を二分する根本的な問題です。信じようとする人たちがいる一方で、神なしに生きることに満足している人たちもいるのです。

復活への信仰は、キリスト教信仰の中でも絶対に欠かせない核心的な要素です。というのも、私たちの信仰全体は、主イエス・キリストの復活を模範とする「死からの救い」、すなわち復活への確信の上に成り立っているからです。パウロが言うように、もし復活が存在しないのなら、キリストも復活していないことになります。もしキリストが復活していないのなら、聖書のすべての教えは偽りであり、私たちの信仰も空しく、何の意味もないものになります。さらに言えば、キリストの復活を証言したパウロをはじめとする使徒たちは、神に逆らって偽りを語る者となってしまいます。もし本当に「死人の復活」などというものが存在しないのなら、キリストも復活しておらず、私たちの信仰は全く無駄なものとなり、私たちは今なお自分の罪の責めを負っていることになります。先に亡くなった人々も、真に滅びたままです。もしこの世の生だけのために生きているのだとすれば、もし死後の命が存在せず、永遠の命への希望が私たちとともに消え去る偽りのものだとなれば、私たちキリスト者こそ、この世で最も哀れむべき存在ということになるのです([第一コリント 15 章 12-19 節](#))。

簡潔に言えば、復活こそが私たちが死に打ち勝つ唯一の道です。したがって、死に打ち勝たれた方への信仰に基づく復活こそが、私たちキリスト者の希望の最終的な目的なのです。私たちの希望は、「神はそのひとり子をお与えになったほどにこの世を愛された。それは御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3 章 16 節)という約束の上に築かれています。すなわち、神の御子に従おうとする者が、復活によって死に勝利し、新しい命、すなわち永遠の命を得ることができるという希望に私たちは生きているのです。([第一コリント 15 章 54-57 節](#)参照)。

キリスト教の徳である希望は、信じる者すべてに約束された祝福された未来に自然と焦点を合わせます。どんなに日々の重荷が焼けつくように重くても、この地上で背負

う荷がどれほど苦しくても、私たちは主イエス・キリストの「栄光に満ちた現れ」とともに訪れる「祝福された希望」、すなわち喜びと慰めの時を確信をもって見つめることができます([テトス 2 章 13 節](#))。この希望の一部は、悪の征服と、主が再臨の際に築かれる天の御国の驚くべき栄光への期待です。しかし、テトスが語る希望のもう一つの大きな部分は、朽ちることのない栄光の体をいただき、主とともに永遠に生きることへの待望です。このためにこそ、私たちは地上のあらゆるものを、復活という到達点に比べて価値の低いものと見なします([ピリピ 3 章 8-11 節](#))。そして、つまづくことなく御国に入るために、キリスト者としての徳の歩みを整え([第二ペテロ 1 章 8-11 節](#))、この地上ではなく天にある本来の国籍にふさわしく、今の卑しい体が新しい姿へと変えられるその日を思いながら、思いを天のことに向けるのです([ピリピ 3 章 15-21 節](#))。

復活の本質：

1. 復活は、私たちの将来の状態に欠かせないものです：復活がなければ、永遠の命はありません。なぜなら、「血肉は神の国を受け継ぐことができないからです」([コリント第一 15 章 50 節](#))。わたしたちはこの地上で肉の体をもって生きていますが、本当の国籍は天にあります([ピリピ 3 章 20-21 節](#))。そして、今は主と同じように地上の肉の姿をまっています、やがて復活された主イエス・キリストの天の姿をもつようになることを、私たちは確信しています([第一コリント 15 章 49 節](#))。

2. 復活は、「蘇生(そせい)」とは区別しなければなりません：ここで言う「復活」とは、永遠に変わることのない新しい状態を意味しており、今のこの地上の体に一時的に戻ることはありません。キリストがラザロを死からよみがえらせたとき、それはあくまで一時的な生き返りでした。マルタが「兄は終わりの日に復活する」と考えていたのは正しかったのです。父なる神が御子イエスの地上での働きを認められた証として、主が死人をよみがえらせたことがあります([マタイ 11 章 5 節](#)；[ルカ 7 章 22 節](#))。しかし、キリストや使徒たちによって生き返った人々も、いまだに最終的な復活の体を待っています([ルカ 7 章 11-17 節](#)；[8 章 40-42 節](#))。なお、ヨハネの福音書には、ラザロの蘇生が果たした目的の一端が示されています。彼がよみがえったという知らせが、人々を集め、主がエルサレムに入られる「棕櫚(しゅろ)の主日(パームサンデー)」に群衆が集まるきっかけになったのです([ヨハネ 12 章 17-18 節](#))。また、主の十字架の死の直前に死んでいた信者たちが一時的に生き返ったことも、同様の意味をもっていました。彼らが生き返ったことによって、神は御子の十字架の働きがすべての人のために有効であることを、目に見える形で示されたのです([マタイ 27 章 52-53 節](#))。

3. 復活は、変化(トランスミューテーション／転化)とも区別しなければなりません。：

ごく少数の信者は、きわめて特別な形でこの世の生涯を終えました。エノク、モーセ、そしてエリヤがその代表的な例です。彼らは「転化(トランスミューテーション)」を経験した人々であり、つまり肉体の死を通ることなく永遠の世界へと移されたのです。モーセとエリヤの場合(それぞれの最期の状況は異なりますが)、彼らが死を経験せずに去った理由は、艱難期(tribulation)の時に再び地上に現れるという神の計画と関係があると考えられます([黙示録 11 章 1-13 節](#))。このように地上の生涯を終えた彼ら三人でさえ、まだ最終的な復活の体を受けてはいません。彼らもまた、他のすべての信者と同じく、復活の体を待ち望んでいるのです。

4. 復活は、中間状態(インタリム・ステート)とも区別しなければなりません：黙示録 7 章で、使徒ヨハネは次のように語っています。彼は、十四万四千人の封印の後に「だれにも数えきれない大群衆」を見ました。彼らは「あらゆる国民、部族、民族、言語の者たち」であり、「白い衣を着て、手に棕櫚(しゅろ)の枝を持ち、小羊の前に立っていた」([黙示録 7 章 9-17 節](#))。後に天使が「この人たちは誰か」と問うと、ヨハネは答えられず、こう告げられます。「彼らは大患難を通過してきた者たちである」(14 節)。この人々はすでに肉体を離れていますが、人間としての姿を保ち、神を賛美して歌っています(10 節)。つまり彼らは、もはや地上の肉体には宿っていないものの、まだ復活の体(唯一、主イエス・キリストのみがすでに復活された)を受けてはいないのです。したがって、肉体の死の後には、現世より優れた中間的な状態が存在すると結論づけることができます。しかしそれは、復活の栄光の状態にはまだ及ばないものです。他の聖書箇所もこの考えを裏づけています。サウルが死者サムエルと接した場面([サムエル上 28 章 13-19 節](#))、イエスの変貌の山でモーセとエリヤが現れた場面([ルカ 9 章 28-36 節](#))、そして特に「アブラハムのふところ」のたとえ([ルカ 16 章 19-31 節](#))です。この最後のたとえでは、ラザロ、金持ち、アブラハムがそれぞれ認識できる形で登場します。彼らは地上の人間と変わらぬ姿を保ち、意識的な会話を交わしています。したがって、聖書から知り得る限りにおいて、私たちの人格も、人間としての本質的な姿も死後に失われることはありません。私たちは、この中間状態も、最終的な復活の状態も、今の生よりはるかに優れていることを確信できます。しかし同時に、それは私たちがまったく別の存在になるという意味ではなく、罪が取り除かれた本来の人間として完成されるということなのです。

5. 復活は現実です：復活の性質や現実性に関する疑問は、現代に限ったものではありません。旧約聖書の中にも復活の教えは明確に示されています([ダニエル書 12 章 2 節](#)参照)。また、主イエスご自身もこのテーマを繰り返し強調されました([ヨハネ 5 章 28-29 節](#)参照)。そして、主の教えを注意深く聞いて理解していた人々も、復活を正しく認識していました([ヨハネ 11 章 23-24 節](#)参照)。それにもかかわらず、新約聖書の時

代においても、復活は依然として懐疑の対象でした。特に、学問や知識を誇りにしていた人々の間では、そのような傾向が強かったのです。使徒パウロが王アグリッパの前で自らの信仰を弁明した際、彼はあえて王を復活という核心的な問題に直面させました。それは王にとって気まずい瞬間でもありました。パウロは、長年にわたって積み重ねられてきた律法主義的な伝統を切り裂き、信仰の中心がどこにあるのかを明らかにしました。すなわち——神を礼拝するということの本質は、復活への希望を抱くことであるということです。これこそが、ユダヤ信仰が本来拠って立つ真の希望であり([使徒行伝 24 章 14-15 節](#)参照)、また私たちキリスト者の信仰の基礎でもあるのです。

今わたしは、神がわたしたちの先祖に約束なさった希望をいただいているために、裁判を受けているのであります。わたしたちの十二の部族は、夜昼、熱心に神に仕えて、その約束を得ようと望んでいるのです。王よ、この希望のために、わたしはユダヤ人から訴えられています。神が死人をよみがえらせるということが、あなたがたには、どうして信じられないことと思えるのでしょうか。(使徒行伝 26 章 6-8 節)

実際のところ、キリストの同時代の人々も、復活とその本質について、今日多くのクリスチャンが抱いているのと同じように混乱していました。重要な宗派の一つであるサドカイ派は、復活そのものの存在を否定していました([マタイ 22 章 23-33 節](#))。また、イエスの弟子たちですら、この問題について十分に理解していなかったことが、[マルコ 9 章 10 節](#)の「彼らは死人の中からの復活とはどういう意味かを論じ合っていた」という記述からも分かります。復活に関する疑問の多くは、主に二つの点に集中します。復活がいつ起こるのかという「時」に関する問題と復活の体がどのようなものかという「性質」に関する問題です。

復活の体：

人間の本来の姿、中間的な姿、そして最終的な姿は、一つの重要な点で常に同じです。人は神によって、肉体的であり、同時に霊的な存在として造られました。神が「土のちりからアダムを形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた」ときから([創世記 2 章 7 節](#)、同 [5 章 1-3 節](#)参照)、すべての「生ける人」は二重の性質(肉と霊)を持つようになりました。この地上での生において、私たちの体は物質的なものであり(初めに土から形づくられたように)、しかし私たちは、やがて主と同じ姿になる日を待ち望んでいます。そのとき、私たちは墮落した肉体ではなく、霊的な性質にふさわしい体を持つようになります([第一コリント 15 章 44-49 節](#))。人間は、神によって肉体と霊の一致をもつ存在として造られました。そして神のご計画のどの段階においても、この構造は保たれ

ています。今の私たちの肉体は弱く、罪によってその本質が損なわれています([ローマ 7 章 18-20 節](#))。この罪に満ちた体は、私たちがこの世にいる限り、絶えず私たちに悪い影響を及ぼします。しかし私たちの霊は罪に汚されることはなく、この地上で神の御子を信じるなら、永遠の世界で罪のない住まいを得ることになります。したがって、死は本来の人間の状態からの逸脱であり、アダムの罪によってもたらされ([創世記 2 章 16-17 節](#), [3 章 19 節](#); [ローマ 5 章 12-21 節](#); [第一コリント 15 章 21-22 節](#))、その結果としてすべての人に伝わりました。現在の肉体は罪と弱さを持つため、長く生きることはできません。しかし、肉体の死は私たちの霊に何の害も与えません。私たちの霊は、今の体が朽ちた後、すぐに別の体(まず中間の体、そして永遠の体)に宿ります。したがって、人間にとっての本当の問題は「死そのもの」ではなく、「どこで永遠を過ごすか」ということです。すなわち、キリストへの信仰によって新しい誕生を受け、死が新しい永遠の命に飲み込まれるのか。それともキリストを拒むことによって、最初の死のあとに「第二の死」が待っているのかということです。

そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっているように、([ヘブル 9 章 27 節](#))

すでに述べたように、聖書の中では中間の状態(interim state)について多くは語られていません。この状態を経験しないのは、終末の時に生きている信者たちであり、彼らは死を経ずに、直接この世の命から永遠の命へと移ることになります(もっとも、初期の信者たちはすでに何千年もの間、この中間の状態にあります)。それでも、私たちは次のことを聖書から知ることができます。この期間における存在は、霊的な存在であると同時に、識別できる「体」のようなものを持つということです。そして、その状態にある個々の人々は、外見によってだけでなく、人格や個性においても認識可能です([ルカ 16 章 19-31 節](#); [サムエル上 28 章 13-19 節](#); [黙示録 6 章 9 節](#), [7 章 9-17 節](#), [11 章 1-13 節](#))。

聖書は当然ながら、最終的で永遠の復活の体に焦点を当てています。これまで述べてきた教えについて、聖書は非常に明確な確証を与えています。[第二コリント 5 章 3 節](#)(ギリシア語本文)にはこう書かれています。今の「幕屋(テント)」つまりこの地上の体一が取り壊されたあと、私たちの霊は裸のままさまようのではなく、「永遠の住まい」に入るのだと。これは地上の殻のような体ではなく、神ご自身が私たちのために備えてくださった天的な体の住まいです。この教えは、使徒パウロにとって非常に大きな励ましと慰めの源でした。パウロが復活について語る箇所には実に豊かな内容が含まれており、ここで彼の教えの中でも特に重要で充実した一つの箇所を、少し詳しく見ていく価値があります。

しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。[種と植物においてそうであるように、動物の体についても同じです。] すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違ってある。[また、すべての天の体が同じ程度の輝きを持つと考えるべきではありません。] 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。(第一コリント 15 章 35-41 節)

パウロの「種のたとえ」は、復活の体がどのようなものであるかを、私たちが今持っている肉体との対比によってよく説明しています。

新しい体が「芽を出す」ためには、まず古い体が地にまかれる(埋められる)必要があります。したがって、キリスト者にとっての死は希望の終わりではなく、むしろ、弱くはかない今の体が、栄光に満ちた朽ちない天の住まいへと変えられるための確かな、必要な前段階なのです。また、芽生える植物が種とつながりを持ちながらも、はっきりと異なる姿をしているように、私たちの天の体も今の肉体といくつかの点で共通しつつ、同時に劇的に異なるものとなります。これは当然のことです。というのも、私たちの肉体は寿命に厳しい限界がありますが、霊の体は永遠に生き続けることができます。さらに、これらの体の「栄光(glory)」、つまり輝きの度合いは(報いに応じて)人それぞれ異なるのです。星や惑星がそれぞれ異なる光の大きさを持っているように、復活の体にもそのような差が現れます。

死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから(確かに存在します)、霊のからだもあるわけである。聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後には霊のものが来るのである。第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。す

なわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう。(第一コリント 15 章 42-49 節)

ですから、私たちの新しい体は、もはや朽ちることがないものになります。罪が住むこともなく、清く、輝きに満ちた体になります。弱さや病に悩まされることもなく、力強く、生き生きとした体になります。つまり、地上での肉の生にふさわしい今の体とは違い、新しい体は、永遠に続く霊の生を生きるために、あらゆる面で完全に整えられたものとなるのです。さらに、この新しい体を持つことは確実に約束されたことです。キリストご自身が、私たちのためにその模範を確立されました。すなわち、まずは肉の体、その後霊の体という順序です。この第一コリント 15 章の第 2 段落は、私たちが受ける復活の体が、今の体が私たちの始祖アダムに似ているのと同じように、キリストの復活の体に似たものであることを明確に示しています。したがって、復活の体の正確な性質をよりよく理解するためには、キリストの復活について書かれた聖書の箇所を考察する必要があります。なぜなら、「彼(キリスト)が現れるとき、私たちは彼に似た者となるからです」([第一ヨハネ 3 章 2 節](#))。

復活後・栄化前の主の顕現は、マタイ 28 章、ルカ 24 章、ヨハネ 20-21 章、そして[使徒行伝 1 章 6-11 節](#)に記されています。ここから、キリストの新しい体(復活の体)の特徴と能力、そして私たちが将来与えられる体について、いくつかの明白な点をまとめることができます。

1. キリストの復活のからだは、真の人間の体としてあらゆる点で認識できる:
 - a. そのからだは触れることができる([マタイ 28 章 9 節](#); [ルカ 24 章 39 節](#); [ヨハネ 20 章 17 節](#); [20 章 27 節](#))。
 - b. 個人として認識できる体である([ルカ 24 章 31 節](#); [ヨハネ 20 章 16 節](#); [20 章 20 節](#); [20 章 26-28 節](#); [21 章 12 節](#))。
2. 復活のからだは通常の人間の活動を行うことができる:
 - a. 話す([マタイ 28 章 10 節](#); [28 章 18-20 節](#))。
 - b. 歩く([ルカ 24 章 15 節](#))。
 - c. 食べる([ルカ 24 章 43 節](#); [ヨハネ 21 章 12-13 節](#))。
3. 復活のからだにおいて、キリストは随意に現れたり消えたりする能力を持つ:
 - a. 出現する([ルカ 24 章 36 節](#))。
 - b. 消える([ルカ 24 章 31 節](#))。

4. 復活のからだにおいて、キリストは驚異的な速さで移動したり、通り抜け不可能な障害を通過する能力を持つ:

- a. キリストは天使が石を動かす前に墓を出ていた([マタイ 28 章 1-3 節](#))。
- b. 閉じられた戸を通り抜けた([ヨハネ 20 章 19 節](#))。
- c. 天に昇られた([使徒行伝 1 章 9-10 節](#))。

私たちは、自分自身も、そしてキリストにあるすでに死んだ愛する人々も、復活のときにキリストと同じような体を持つことを確信しています。しかし、重要な点として、復活後のキリストに関する多くの箇所は、彼の昇天・天における着座(セッション)・栄化の前の姿を描いているということを覚えておく必要があります。復活ののちにキリストが持つておられる体は、これらの出来事の前後で確かに同じものでありますが、その外観は栄化の後にはまったく異なっています([黙示録 1 章 12-16 節](#); [使徒行伝 9 章 1-6 節](#), [22 章 6-11 節](#), [26 章 12-18 節](#))。同じように、私たちの復活の体もまた「栄光に満ちたもの」となることを期待することができます([第一コリント 15 章 43 節](#))。

復活の後、私たちの新しい体は、今の体と多くの点で似ているでしょう。しかし、それは想像を超えてよりすぐれたものになります。私たちは依然として同じ人間であり続けますが、罪がなく、またこの世の人生で私たちを苦しめてきたあらゆる否定的なものから解放されるのです([黙示録 21 章 3-4 節](#))。

復活は、すべての人間の最終的な状態です。義人だけでなく、この世でイエス・キリストを拒んだ不義の人々もまた、最終的な復活を経験します(ただし、それはさばきの復活です: [黙示録 20 章 11-15 節](#); [ダニエル 12 章 2 節](#); [マタイ 25 章 31-46 節](#))。

人間における霊と体の一体性は永遠のものです。死は異常な状態であり、もともと私たちの最初の両親の罪によってもたらされた裁きの結果です。しかし信じる者は、まずは中間の状態([第二コリント 5 章 1-10 節](#); [黙示録 6 章 9 節](#))を経て、やがて私たちの主イエス・キリストの姿に似た完全で永遠の体を持つ、至福の永遠を待ち望むことができます。

復活の時期について：復活は、すべての人間に定められた運命です。したがって、復活には二つの明確な区分があります。すなわち、不義の者の復活と義人の復活です([ダニエル 12 章 2 節](#); [ヘブル 9 章 27 節](#))。

1. 不義の者: 救われなかった人々の復活は、人類の歴史の終わりに起こります。その時、彼らは「大いなる白い御座」の前で裁きを受けます([黙示録 20 章 11-15 節](#))。。こ

の復活は、今の人生でキリストを拒んだ者たちの最終的なさばきの一部であり、したがって、福音の核心に関わる出来事です([使徒行伝 17 章 31 節](#), [24 章 25 節](#))。

2. 義人: [第一コリント 15 章 20-28 節](#)によると、信じる者の復活は三つの段階で起こります。「最初の実であるキリスト、次にキリストの来臨のときに属する者たち、そしてその後に関わりが来て、王国を御父なる神に渡される」。

a.「キリストの来臨のときに属する者たち」: この第二の段階はキリストの再臨の時に起こります([第一テサロニケ 4 章 15 節](#)以下)。すでに主のもとに召されたすべての信者は、キリストが御自分の千年王国を主張するために再び来られるその時に復活するのです。

b.「その後に関わりが来る」: キリストの千年王国の支配が終わる時、主は王国を御父に引き渡されます([第一コリント 15 章 24 節](#))。その時「死は勝利にのまれる」のです([第一コリント 15 章 53-57 節](#))。

結論: 信仰者である私たちは、よみがえられた主と同じように、新しく、力強く、いきいきとした、栄光に満ちた体を持つその日を、確かな望みと期待をもって待ち望んでいます。その体で、私たちは永遠に神と顔と顔を合わせて生きるのです。この地上の人生はしばしば失望をもたらしますが、復活は私たちの想像を超えるものです。私たちの存在のどの部分も消え去ることはありません(ただ罪のみが取り除かれます)。復活とは、この世のささやかな益が失われるのではなく、むしろそれに加えられるものであり、さらに言えば、無限に高められ、私たちの卑しい現状が永遠に輝く未来へと変えられるのです。世は「人の行き着く先は墓だけだ」と語ります。しかし私たちは、信仰による確かな確信をもって知っています。墓が主イエス・キリストを閉じ込めることができなかったように、私たちもまた閉じ込められることはありません。私たちは、主の力と犠牲によって、死と墓に打ち勝つのです。そして新しい体、すなわち朽ちることのない復活の体をもって、主と共に尽きることのない幸いな未来を生きるのです。したがって、復活こそペテロが語る「生ける望み」です。それは、信仰によって確信する希望であり、私たちの体が復活によって永遠に生きるという期待です。それはまた、聖霊による新しい誕生を通して私たちのうちに宿る永遠のいのちが、将来の日に花開き、救い主であり主であるイエス・キリストと顔と顔を合わせて生きる永遠のいのちの現実となるという、力強い希望なのです。

[ペテロ #21 「信仰の忍耐」に続く]